

奨学一時金（国際会議等参加費支援）受給者報告

ISAIA に参加して

大学院理工学研究科博士前期 都市システム工学専攻 1年 千田 七海

12/3 に中国建築学会が主催した、日本、韓国、中国の3か国合同の第13回アジア建築交流国際シンポジウム（ISAIA 2022）に参加しました。

例年主催国での現地開催となるのですが、コロナの懸念もあり、オンライン発表と現地でのポスターセッションのハイブリッド開催となり、私はオンラインでの発表を行いました（写真1, 2）。

今回のシンポジウムでは全部で6つあるテーマのうち、Urban Planning and Design の分野で、卒業研究である「Spatial Characteristics of Tokyo Based on Views from JR Station Platforms」（日本建築学会で発表した際のタイトルは、「JR 山手線及び常磐線のプラットホームにおける眺めからみた東京都市圏の外延」）を発表しました。私の卒業研究では、駅のプラットホームからの眺めを、東京都市圏を代表する景観であると位置づけた上で、眺めを構成する要素とその配列を検討することから、東京都市圏の典型的な眺め（以下景観パタン）の抽出を行いました。さらに路線内における景観パタンの地理的分布を検討し、隣り合う駅間での反復を見ることから路線全体のパタンによる連続帯の抽出を行い、最終的にはその連続帯をもって、都心から郊外にかけての景観的な外延を明らかにしました（図1）。

私のセッションは13人で、一人8分の発表と2分の質疑応答の時間を設けられていましたが、質疑応答は2人まとめて行われ、実質4分行いました。発表の際にでた質疑は下記のとおりとなっています。

>最終的にこの研究はどんなことに役立つのか？

-東京はもともと複雑な景観を持っているため、この研究では東京都市圏の景観構造を明らかにすることで、今後の無秩序な開発を抑制する一助になり、将来的な都市計画に役立つのではないかと考えている。

>駅間の景観を捉えなくてよいのか？

-駅前景観はその地域を代表する景観であると考えているため、今回の研究ではプラットホームからの眺めに絞っている。

今回の学会に参加して感じたことは、同じアジア圏だからこそ類似した都市の形成がなされたり、研究手法があったことです。例として、韓国では日本と同様に放射状に鉄道網が発達し、鉄道は人々の生活の欠かせない都市基盤施設となっています。また鉄道網に沿って都市が発展したこと

により、ソウルのような大きな都市圏を形成しており、東京とほとんど似たような状況になっていることが挙げられます。また、私は構成学をもとに今回の研究を進めてきたのですが、他の国でも同じように、類型を取り出す研究があり、構成学と似たような学問が海外にもあるのだと見識を深めることができました。

今回のシンポジウムでは Urban Planning and Design の他にも、建築計画・デザイン分野、建築歴史・理論の分野など定番の分野もあれば、ビッグデータやプログラミングといった斬新な分野もあり、発表内容が多岐にわたっていました。特に後者の分野はこれからの日本の建築業界の大きな課題となっていくだろうと思い、興味深く公聴してました。この学会を通し、国際学会ならではの多様性に触れることができたと感じています。

私はこの卒業研究をさらに広域に発展させた修士論文を執筆しているため、今回の経験や気づきを修士論文に落とし込んでいきたいと考えています。

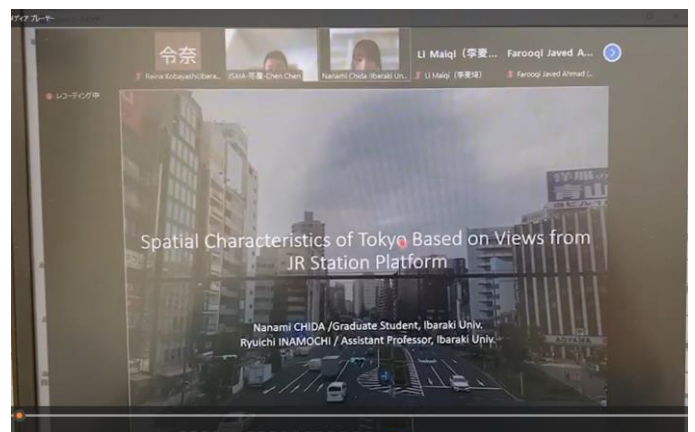


写真1,2 オンラインでの発表画面（写真1；執筆者）

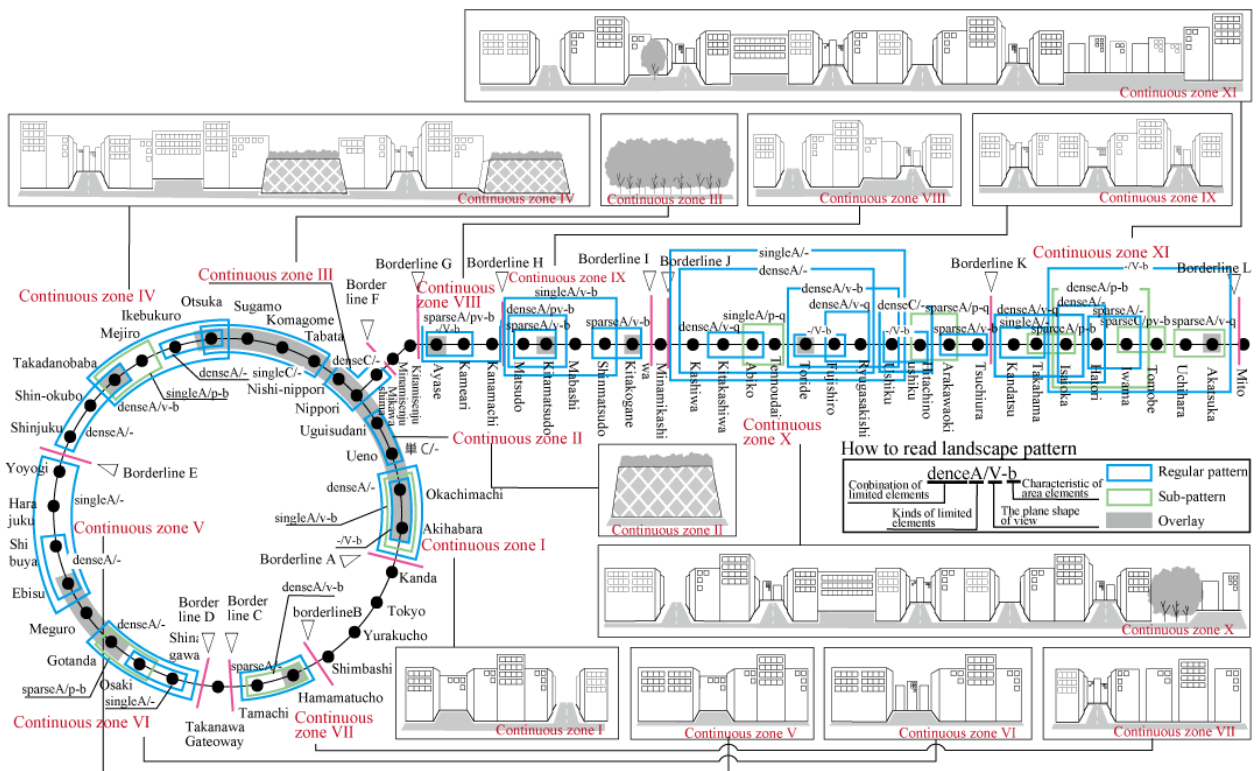


Figure2 Station landscapes categorized by geographic distributions an example images

図1 JR山手線及び常磐線における連続帯を検討した図